様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 3 月 31 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520011
研究課題名（和文）ギリシア哲学における快楽主義の系譜の再検討とその史的意義の再評価

研究課題名（英文）Reexamination of the tradition of hedonism in Greek philosophy and reevaluation of its historical significance

研究代表者
三浦　要（MIURA　KANAME）
金沢大学・人間科学系・教授
研究者番号：20222317

研究成果の概要（和文）：古代ギリシア快楽主義の検討を通じ，特に，原子論者デモクリトスの快楽主義が一般的解釈に反し倫理的理論として肯定的に評価できること，同じ快楽主義のキュレネ派との相違点が顕著であるエピクロスの規範的倫理学説が，個人の閉じた生での幸福の実現を目標にしているかぎりで公的倫理の基礎を与えない点で限界を有すること，そして，快楽と人間とが親和的であるという快楽主義的洞察が真理であるからには，快楽主義が個人倫理の源泉を考える上で依然として有効性をもっていることを考察した。

研究成果の概要（英文）：In this research, we are concerned with the tradition of Greek hedonism to show, in the first place, the possibility of positive evaluation of Democritus' hedonism as a coherent ethical system, and, in the second, the limitations of Epicurean hedonism as normative ethics because of its psychological egoism, and, furthermore, the general effectiveness of hedonism itself in considering the source of personal ethics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170.000
年度			
年度			
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：哲学
科研費の分科・細目：哲学 ・ 哲学･倫理学
キーワード：ギリシア哲学，デモクリトス，エピクロス，快楽主義，倫理学説

１．研究開始当初の背景

倫理学上の立場としての快楽主義そのものを扱ったものは，倫理学の領域で多く発表されているが，古代ギリシアにおける快楽主義の展開というテーマに即した研究は少なく，どうしても個別の哲学者や学派に関連した限定的研究となっている．例えば，欧米のすぐれた研究者による *The Cambridge History of Hellenistic Philosophy*, K. Algra et al.(eds), Cambridge, 1999 や，*A Com- panion to Ancient Philosophy*, M.L.Gill, P.Pellegrin (eds), Oxford, 2005 を見ても，状況は同様で，倫理思想の通史の中で，ソクラテス以前も含めた形で快楽主義がどう位置づけられるのか詳細には論じられていない．

そもそも，日本でギリシア哲学の研究といえばプラトン，アリストテレスが依然として中心となっており，ソクラテス以前哲学，さ

らにはヘレニズム期の倫理思想について研究が活発に行われているとはけっして言えない状況にある．しかし，それは，こうした哲学者や倫理思想が，考察に値しない，取るに足らないものである，ということを意味しない．

私はこれまで，ソクラテス以前の哲学を，特にその自然哲学に重点を置いて考察してきた（過去十年での科学研究費補助金の研究課題は「初期ギリシア哲学における認識論的観点からの人間把握について」，「ソクラテス以前の哲学の展開における神話の意義について」，「プラトン哲学の基底における構成的要因としてのソクラテス以前哲学について」である）．そして，その中で，彼らの自然哲学が倫理学と密接不可分の関係にあり，しかもその倫理学説が十分な独創性を備えており，自然哲学だけを考察していたのでは彼らの哲学の総合的な理解には結びつかないと改めて考えるようになった．

アリストテレス以後の哲学史の「常識」では，倫理学はソクラテスに始まったことになっているが，無論，それはかなりバイアスのかかった理解であり，実際には例えば，ピュタゴラス，ヘラクレイトス，エンペドクレス，デモクリトスなど，「精神」のあり方やあるべき生き方について思考した哲学者は多い．したがって，これまでの自然哲学を中心とした研究を承けて，ソクラテス以前も含めたヘレニズム期までの倫理思想，その中でも一つの重要な潮流となった快楽主義的倫理学説の系譜をたどり，その特質を考察してみたいと考えるに至った．

２．研究の目的

本研究は，ソクラテス以前からヘレニズム期に至るまでの古代ギリシア哲学の倫理学的領域における快楽主義――それは自然主義的基盤をもつ強固な理論として，多くの賛同者を獲得してきた――を，それぞれの哲学者のテクストに厳密に基づきながら総観し，これまで一体的に捉えられてきたとは言い難いその影響関係や個々の特質を再評価すると同時に，歴史的に見たときの意義がいかなるものであるのかを検討･考察するものである．

具体的な射程としては，まずソクラテス以前から始めて，これまであまり論じられることのなかった原子論者のデモクリトスの倫理思想の特質を考察し，彼が，プラトンと同様に幸福が外在的な善の獲得を目指す生にあるのではなく，人間の魂（精神）にこそ存していると主張する点で，その幸福主義はよりプラトンに接近しうるものであることを示す．このようなデモクリトスの快楽主義はまた，古代ギリシアの典型的な快楽主義の表明であるエウドクソスの快善同一主義とも根本的に異なったものである．

次に，ソクラテス倫理学の究極的帰結の一つであるキュレネ派の快楽主義を考察し，快楽の持続性や行為の目的，魂と身体の優先順位などの問題をめぐる派内の理論展開と他派との相違を検討する．

続いて，エピクロスおよびエピクロス派の快楽主義的倫理学説を扱う．エピクロス派は他のヘレニズムの哲学を念頭に，それらに対抗できる独自性をもった快楽主義を提示することにつとめた．エピクロスは快楽を精神の平静と身体の苦痛のなさに認めたが，欲望と快楽の限度に関する彼の説は，「適度な行為」というストア派の見解と似通っている．しかし，徳に関してはストア派ときわめて異なる見解を示す．同じ快楽主義であるキュレネ派との関係とともに，対立するストア派との関係も視野に入れながら，エピクロスおよびエピクロス派の倫理学説の内実を明確にする．

３．研究の方法

方法としては，史的展開という視点から，それぞれの哲学者の著作原典および後代の二次的証言資料を，研究書･研究論文を参照しつつ精確に読解し，それを踏まえた上で，ギリシア哲学における快楽主義を比較検討するという方法を採る．具体的な考察項目は，上記の「研究の目的」に対応して次のようになっている．

(1) ソクラテス（プラトン）との比較を念頭においた，デモクリトスの快楽主義の解明
(2) エウドクソスの快善同一主義の検討
(3) キュレネ派の快楽主義の考察
(4) エピクロスおよびエピクロス派の快楽主義の内実考察
(5) 以上の快楽主義的倫理学説の影響関係の総括と，その史的意義の確認，という形で考察を進める．

(1)から(4)までを有機的に連関させつつ，(5)へと考察を進めていくことになる．(1)については，『ソクラテス以前哲学者断片集』が基本的文献であるが，これに加えて特にC. Bailey, J. C. B. Gosling & C. C. W. Taylor, J. F. Procopé, C. C. W. Taylor, J. Warrenの研究書が重要な参照文献となる．特に対処するのは「デモクリトスの著作は倫理学に関する体系的著述ではない」(C.Bailey)という一般的評価の妥当性の問題である．原子論が快楽主義的倫理説と親和的であることの確認は，(4)での考察とも関わってくるものである．

(2)についてはアリストテレス『ニコマコス倫理学』の記述が原資料となる．そこでの「標準的な快楽主義」すなわち「もっとも望ましいものが最善である．ところであらゆるものは快楽を目指す．ゆえに快楽は最善である」という快楽主義はそのままキュレネ派およびエピクロス派の快楽主義に連絡しており，これを確認することで(3)(4)に議論をつなげていく．

(3)(4)についてはディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』が基本的な文献であり，これ以外にE. Asmis, M. Conche, M. Erler & M. Schofield, P. Mitsisの研究が有益な参考文献となる．これまでの研究成果を前提としながら，キュレネ派とエピクロス派の影響関係，エピクロスの快楽主義の特徴を検討する．とりわけ，いわゆる「動的快楽」と「静的快楽」について，独自の解釈を提示する．

なお，以上のように本研究は文献研究が基本となるので，その遂行のために，オランダ・国立アムステルダム大学図書館および国立ユトレヒト大学図書館において日本で入手や参観が困難な文献を調査収集する．

４．研究成果

本研究による主要な成果および今後の検討課題は以下の通りである．

(1)資料が残っている哲学者たちで，おそらく西洋哲学史上初めて生の「目的」を中心的概念としたのは，原子論者デモクリトスであろう．彼の快楽主義的な倫理学説を，彼の後の倫理学説，特にエピクロスやキュレネ派の快楽主義との関係を念頭に置きながら，考察した．

デモクリトスの倫理学的著作断片の多くは伝承の過程でアフォリズムの形へと縮約改変を受けており，一定の学説として再構成することには困難がともなうため，彼を，体系的な倫理学説をもたない，処世訓を与えてくれるだけのモラリストと見なす研究者も多い．しかしそれは彼の思想に対する過小評価と言わざるをえない．

むしろ彼は，ソクラテスよりも前に，生の目的を魂の善としての「明朗闊達さ」と措定し，行為の普遍的な規範を規定しようとしており，その限りで彼は体系的な倫理学説を志向した思想家と言える．

デモクリトスは「明朗闊達さ」を人生の目的としたが，その特徴は，アリストテレスの中庸論を先取りしたように「適度」ということを強調するところにある．彼にとって幸福とは，例えば後のエウデモスが主張するような，あるいはキュレネ派が主張するような，単純な快善同一主義に基づくものではない．むしろ，幸福な生とは，無条件な快の充足ではなく，快の識別と適限の認識に基づいたものであり，そのような生こそがもっとも喜ばしく快適な生ということになる．では快の選択と忌避はどのようになされるのか．彼は，端的に裕福であることを成功と繁栄と見なす慣習的な幸福観に異を唱え，そのような一般的通念から離れるよう求める．そしてあらためて自分のもとにあるものを正確に査定し，また，他者の所有するものや生活，行為を自分のものと比較して，過剰と不足を避けるように要請する．そこで必要とされているのは，有益性という観点から「考量」する力と「適度」に関する「判断力」である．かくして，人間の行為を最終的に動機づけるものは，「明朗闊達さ」という動揺のない平静で快活な魂のあり方であり，それは適限を知ることによる諸快の選択と忌避を前提としていた．そしてこの自己の明朗闊達な生にとっての有益性が強調され，適限を知るという人間の主体的な知恵――むろん，それは人間の自律性が前提となっている――が求められるとき，デモクリトスの倫理学説はいわゆる社会道徳の観点から見たとき，功利主義的な様相を呈しているのである．

デモクリトスの倫理学説は，自律性を基本としてあくまでも自己の利益を追求する自己中心的な快楽主義――ただし上述のとおり，キュレネ派のような無条件で瞬間的な快楽の享受を認めるものではなく，あくまでも適度を守った啓蒙的なものだが――であり，これはそれ自体が快である「明朗闊達さ」を善なる人生の目的としたことから必然的に帰結するものであった．

従って，正義や勇気，節制といった伝統的な徳も，人為的なノモスしての法制度や道徳，そして国家も，自己の目的の実現にとって有益であるかぎりで評価されることになった．彼の倫理学説には，快楽の本性の厳密な規定，人間の行動の原理をまずもって快楽に置くということの妥当性，あるいは，長期的視点に立って考えられた快と個別の有益な対象がもつ快との整合的関係など，問われるべき問題は依然として残るが，それでもなお，それが一貫した体系的な学説を志向するものであることは明らかであろう．

以上の成果の一部は「デモクリトスの倫理学説について」と題して『金沢大学人間科学系紀要』１(2009)に発表した．本論文は金沢大学図書館の学術情報リポジトリにも登録され，広く公開されている．

(2)ヘレニズム期初頭の原子論者エピクロスは，当時の他の哲学者たちと同様に，人生の目的とは何であるかという問いを哲学の重要な問いのひとつとして提起した．そして

快楽主義的な立場を表明する彼は，快楽を善なるものとして追求し実現することを人生の目的であると主張する．しかし，快楽主義ということばは多義的であり，快楽を語る哲学者たちの間でもその当の快楽の本性の理解に関しては各人各様で，安易な総括はそれぞれの快楽説の独自性を覆い隠すことになる．

ではエピクロスの快楽説の独自性はどこにあるのか．彼にとって，最高善としての快楽は，魂における平静と身体における苦痛のなさというものである（これは，われわれが通常「快楽」ということばでイメージするものとは根本的に異なり，明らかに counter-intuitive であるように思われる）．

そして彼は，快苦を長期的視野から理性的に評価しつつ生きる生き方を示したが，このときしばしば問題となるのは「動的快楽」の意味である．これをキュレネ派と関連させて身体的快楽と解することはできない．むしろそれは，魂における「愉楽」であり，つまり結果としての快楽ではなく――それは魂における平静と身体における無苦としての「静的快楽」である――静的快楽へと移行する過程にある快楽である．魂における快楽と身体における快楽は，それぞれが限度における充足の結果であるときに，至福な生に直結する．一方だけが得られても，幸福な生とは呼べないという意味で，これらの間には，強度や持続などの点での相違はあっても，優劣・主従の差はない．両方の快楽の実現が究極の生の目的ということになる．

善悪を快苦に還元するエピクロス快楽主義の出発点にはいわゆる「心理的事実」がある．つまり，エピクロス派に限らず，ストア派もアカデメイア派もペリパトス派も，倫理的行為の基礎は生まれたときから自然本性的に組み込まれていると前提し，幼年時代にもっとも容易に「自然の意向」を認めることができると考え，人やその他の動物の揺籃期に見て取れる振る舞いや心理を観察し，人間にとって自然本性的事実は何かを確定する．そしてエピクロス派はその事実として，生きものは元来，快楽と類縁的関係にあり，これを喜ばしいものと感じ，苦痛とは本性的に相容れずこれを嫌悪するという心理的事実を前提とする．

しかしながら，この「事実」がまさに事実として普遍性をもちうるのかどうかはなはだ疑問であり，またその規範的倫理学説は，隣人や共同体の幸福ではなく個人の閉じた生における幸福の実現を目標においている以上，利己主義的なものとならざるを得ず，また他者の幸福への配慮は自己の幸福のために必要であるかぎりでのみ合理性を持ち，徳や友愛や正義ですら手段に過ぎないこととなり，共同体における倫理の基礎を与えない．

自然学的基盤を背景に，快楽だけで体系的に首尾一貫させようとし，しかも競合するキュレネ派などの諸学派との応答の中で形成されたために，その快楽主義は多くの問題点を含んでいる．しかし，人間の行動の原理をいかなる快楽や感情にももとめない倫理学説（例えば義務論など）も心許ないと言わざるをえない．快楽と人間が親和的であるという洞察は依然として真理であるからには，エピクロスの快楽主義は少なくとも個人倫理の源泉を考える上でも興味深いものである．

以上の成果の一部は「エピクロスにおける感覚と快楽」と題して『哲学・人間学論叢』１(2010)に発表した．本論文は金沢大学図書館の学術情報リポジトリにも登録され，広く公開されている．

(3) エピクロスは人生の目的について，「われわれは快楽を，至福な生の始めであり，また終わりであると言っているのである．というのは，われわれは快楽を，われわれが生まれるとともにもっている第一の善と認めているからであり，そしてこの快楽を出発点にして，すべての選択と忌避を行っているし，また快楽に立ち戻りながら，この感情を基準にして，すべての善を判断しているからである．」（*Men.* X, 128-129）と語り，この快楽をさらに厳密に規定し、「放蕩者たちの快楽や，享楽のなかにある快楽のことではなくて，身体に苦痛のないことと，魂に動揺がないことに他ならない」（*Men.* X, 131)とする ．

エピクロスは人間のもつ欲求を区分する中で，自然的で必要な欲求として，幸福のために必要な欲求，身体の善きあり方のために必要な欲求と，生そのもののために必要な欲求を挙げていた．これらの欲求がその限度において充足されるとき，身体における無苦と魂における平静が得られる．では，この「身体の無苦と魂の平静」という生の目的を達成し幸福をえるためにわれわれが理解しなければならないこととは何か．

それが，その後のエピクロス派に「テトラパルマコス（四療法)」と呼ばれることになる幸福への処方である．すなわち，「神は恐怖を与えるものではなく，死は煩いのもとではない．そして善きものは獲得が容易であるのに対して，恐ろしいものは耐えるのが容易である」．神々に関する臆断を排除して，神々がわれわれとは無関係であることを知り，また死が何ものでもなく，死後の魂の存続はありえず，したがって冥府での懲罰も単なる物語に過ぎないことなどについて正しく理解すること，そしてまた，自然的で必要な欲求とそうでないものとを判別すること，これによって魂の健康がもたらされる．それゆえに，哲学は魂にとっての癒しであり，真の哲学を語るエピクロスのことばは幸福のための「処

方箋」なのである．このように，エピクロスそしてエピクロス派にとって，死が何ものでもないとする「真理」（「死無害説」）は、あらゆる死の恐怖を取り除くことになり，快楽としての「魂の平静」と幸福な生の基本的条件のひとつとなっている．

ではエピクロスの快楽主義の核となっているいわゆる「死無害説」の内実とはいかなるものか．彼にとって死とは，人の存在と非存在とを分かつまさに部分をもたない幾何学的な点のようなものであり，「死につつある」といった動作の継続とは無関係であり，また未来に予期されるような死でもない．それは瞬間的な状態変化であり，恐怖や苦痛の対象とはなりえない．死はわれわれにとって何ものでもないとする彼のこの主張は，一見非の打ち所のないもののように見える．しかし，同時にそれはわれわれの直観に明らかに反する．死はどう見てもわれわれにとって悪しきことであると思われるのである．

彼の主張には「時の要件」と呼べる要件と，「経験の要件」と呼べる要件によって支えられている．前者はつまり，ある人にとって災厄の経験はある特定の時のことでなければならないということ．何かを自分にとって災厄だと言うためには，そのことが当人の存在しているある特定の時に悪しきことでなければならないが，死は，存在する主体にとってそれが災厄であるような「時」がないので，何ものでもないのである．後者は，ある人にとって何かが災厄であるためには，その当人がその不快な経験を主体となって自覚していなければならないということ．死は，その当事者が死という不快な経験の自覚的主体とはなりえないがゆえに，死は当人にとって災厄ではないのである．

これまで T. Nagel を初めとして多くの哲学者たちが，エピクロスのこの主張を反駁しようと試みてきた．Nagel はたいていの幸福と不幸は単に現下の明確な状態によってよりむしろ経てきた歴史とこれからの様々な可能性によって同定される人をその主体としてもつのであり，またこの主体が一連の時空の中に正確に位置づけられるのに対して，その人に降りかかる善きこと悪しきことについてはそれは当てはまらないと言う．

しかし，善きことや悪しきことが Nagel などの言うようにいわば無時間的なものであるなら，それはかえって当人の生のいかなる部分にも位置づけることのできない impersonal なものとなろう．また，生きていれば得られるはずの善きものを剥奪するがゆえに死は悪しきものである，と Nagel は主張するわけだが，死なずに生き続けるならばより多くの善きものが必ず得られるという前提はエピクロスにはない．生の時間的長短がその生の質を決定することはない．彼の快楽主義においては，死なずに長生きしても，それだけより多くの善きものとしての快楽が増大するわけではないのである．

エピクロスの推論はわれわれの直観に反するにもかかわらず容易には反駁できそうにないが，エピクロスに反論するひとつの方法は，死とは瞬間的な状態の移行であり，またその変化の結果としか言えないという前提に異を唱えることであろう．そして実は原子論そのものが，死ぬということが死という終点に向かっての変化のプロセスを含んだ動作であると考える余地を残している．彼が魂を理知的部分と非理知的部分とに分類していたとすれば，魂の四散という事態が魂の原子の運動によって説明される以上，生命保持の鍵を握っている理知的部分が残存している一方で，非理知的部分が一定のプロセスを経ながら身体から退出していくことは十分に可能なことなのである．

また，エピクロスに対する反論はもっぱら「死は悪しきものではない」という主張をその標的として展開されていた．たしかに，エピクロスからそうした主張を引き出すことは可能である．しかし，死がけっして悪しきものでないならば，生の価値は相対化される．そしてそれは，例えば，懸命に生きることの否定や自殺の肯定につながる．けれどもエピクロスが死の分析を通じてまずもって言わんとしていることは，「死は悪しきものではない」ということではなく，正確には，「死は善きもの悪しきもののどちらでもない」ということであって，つまりはソクラテスのように，「われわれには死が善きものであるか悪しきものであるかを知るすべがない」ということなのである．

逆に，われわれに確実にわかっているのは，この生こそが生きるべきものであるということである．死がどのようなものかはわからないが，われわれは死すべき存在であり，生が死によって終わることは知っている．知りようのないものよって快楽の享受を妨げられることなく，ひたすら苦痛のない生を生きるように努めればよい．とすれば，善き生，幸福な生へとわれわれを促しているのは，実は死そのものであると言える．生が本来的に価値あるものだとしたら，その価値の源泉は，その生を特徴づける様々な偉業や達成であるよりも先に，その生をただ一回のもの，唯一のものとしている死に他ならない．そのようなものとして死を評価することは，災厄として死を忌み嫌うこととは基本的に異なり，十分に根拠のあることなのである．

エピクロスは，耐え難い苦痛の中でも自ら死を選択することなく，過去の快い思い出でもってその苦痛に耐えようとした．死を何ものでもないと主張することの意義は，

実は「よく生きる」ということへの促しにあるのではないだろうか.

以上の成果の一部は「死は本当にわれわれにとって何ものでもないのか？――エピクロスに見る死の分析――」と題して『哲学・人間学論叢』2(2011)に発表した．本論文は金沢大学図書館の学術情報リポジトリにも登録され，広く公開される予定である.

(4)快楽そのものを，プラトンやアリストテレスは善悪二面において考察し，人間的善の構成要素として快楽を考えていたが，キュレネ派は言うに及ばず，デモクリトスもエピクロスも，基本的に快楽を無条件に善なるものと見なした．キュレネ派は彼らの快楽主義を正当化するために，子どもの頃からわれわれは本能的に快楽に親しんできており，いったんこれを手に入れるともはやそれ以上に何ものも追い求めはしないという議論を行うが，エピクロスも（そしておそらくデモクリトスも）この議論を受け容れる.

しかし，概してエピクロスの快楽主義はキュレネ派の人々のそれとは顕著なコントラストを見せていた．彼は瞬間的・身体的快楽ではなく，期待と記憶の快楽によって強化される「静的快楽」を強調し，また苦痛のない状態は中間的状態であると主張するキュレネ派に対して，中間状態はないと主張した．つまり，キュレネ派の挑戦に応じてエピクロスはその快楽主義をより洗練された，しかも包括的なものに仕上げたと言える.

むろん，キュレネ派（例えばアンニケリス）も，初期のアリスティッポスの無防備で通俗的な快楽主義を修正し，エピクロス派とも対決できるような合理的倫理学説を展開していった．こうしたダイナミックな理論継承をへて，古代ギリシアの快楽主義はヘレニズム世界で一定の地位を築くことになったのである.

(5)今後の課題：古代ギリシアにおける快楽主義を検討するとき，無条件な快楽主義に対する批判者としてのプラトンとアリストテレスを無視するわけにはいかないし，実際に研究の過程で様々な形で触れてきた．しかし今回の研究は，もっぱら快楽主義を主唱している側の学派をメインに扱うものであり，プラトンなどの哲学者(彼らの快楽に対する態度はすでに様々に論じられてきている)については主題的に扱うことはせず，あまり論じられることのないデモクリトスを初めとする原子論者を軸に快楽主義の系譜を考察してきた．ただし，その中でもキュレネ派については資料上の制限もあり，またエピクロスの死の分析を考察する必要性からも，当初の研究期間内に詳細に扱うことができなかった．これについては更に深く検討を行う必要があると感じているが，今後の研究の課題としたい.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 三浦　要，「死は本当にわれわれにとって何ものでもないのか？　――エピクロスに見る死の分析――」，『哲学･人間学論叢』2（2011），pp.43-64　査読無

② 三浦　要，「エピクロスにおける感覚と快楽」，『哲学･人間学論叢』1（2010），pp.39-58　査読無

③ 三浦　要，「デモクリトスの倫理学説について」，『金沢大学人間科学系紀要』1（2009），pp.37-56　査読有

〔図書〕（計１件）

① 三浦　要，『パルメニデスにおける真理の探究』，京都大学学術出版会，2011，総頁数 295

〔その他〕
ホームページ等
http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/handle/2297/17155

http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/handle/2297/24269

６．研究組織
(1)研究代表者
三浦　要（MIURA KANAME）
金沢大学・人間科学系･教授
研究者番号：20222317